
とある温泉旅行

セウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある温泉旅行

【Nコード】

N4953R

【作者名】

セウル

【あらすじ】

フルメタの温泉旅行に、なのはたちを加えてみた作品。色々さし換わっていますが、気にせずに。

（前書き）

特にありませんが、キャラ崩壊注意。

「え?!」

「だ〜から。温泉!」

「でも・・・」

「いつも頑張ってるから明日とあさっては非番なんよ」

「それなら・・・」

上層部の計らいで、フェイト、なのは、はやては温泉に行くことにした。

一方・・・

「ほらほら、みてくださ〜い」

テッサがマオと宗介を呼ぶ

「明日の旅行でこれ着るんです」

「明日の旅行?」

マオと宗介が顔を見合わせて聞く

「聞いてないんですか? ウェーバーさんがセッティングしてくれたんですよ?」

浮かれるテッサ・・・

しかし・・・

「温泉・・・」

「わかりやすいわね」

「そうだ、実はですね〜」

「え?」

「いやあ、光栄です」

「久しぶりやね、クルツくん」

「はい。今日という日をどれだけ待ち望んだか
クルツの嘔泣きをはやてが笑う。

「初めまして・・・だよね？」

「は・・・ははははい。風間信二です。」

「私は、高町なのは、こっちは・・・。」

「フェイト・テストロッサです。」

「お・・・俺は小野寺孝太郎。おのDで。」

女子チームも挨拶を終えて、温泉へ向かう

「私と、なのは、はやて、相良君」

「私は、テッサ、かなめ、瑞樹ちゃん、蓮ちゃん」

「・・・。。。」

「な・・・なんだ？」

「せやね、相良君。恨まれとる」

男子勢の殺意の目を受ける約一名も車に乗り込み、出発する。

「あはは、クルツくん達辛いやろね」

「なんで？」

「え？だって、女子がいるのに、男子だけで移動や。辛いはずや。
はやてが笑う。

「・・・フェイトちゃんもそうやけど、なのはちゃんも相当、鈍
い・・・。」

クルツくん達の餌食にならんとええけど・・・。

「ふむ・・・良い景色だ」

3時間かけ・・・奥多摩山中

「へえ、中々良い感じね」

「トラディショナルなホテルですね」

楽しそうに話す、女子たちに比べ、

「相良死んでしまえ」

「相良君うらぎりもの！」

「な．．．なぜだ？」

「あははは。きにせえへんでええんとちゃう？」

「風間君達、どうしたの？」

「あついえ．．．．．なんでも。」

なのはに聞かれ、咄嗟に視線を逸らす。

．．．．風間君はなのはちゃん。オノDくんはフェイトちゃんやね。

．．．．．あれ？私は？

「だが、楽しみはこれからだぜ？」
クルツがにやける。

「ま．．．まさか。」

「アレですか？！」

「そう、あれだ。」

「アレって何です？」

「「「?!」「」」」

フェイトが振り向いて聞く。

．．．．あらら．．．．フェイトちゃん。聞いたらあかん。

「どうしたんですか？そんな驚いて」

「あついやあ．．．．．その。」

「なんでもない。男子の楽しみだ。」

「そついうのつて、私嫌いです。」
なっ?!

あはは、オノD撃沈。

フェイトちゃんは差別的なものは嫌いやらね〜。

まあ、良い気味や。

私を選ばなかったこと・・・後悔させたる。

「クヒヒ・・・あははは」

「は・・・はやて？」

そして・・・

「窓からの眺め、最高じゃないですか〜」

「そうやな〜広域魔法使えそうに無いなあ。」

「え？」

「いや、何でもないで。」

「時間あるし、温泉いこつ」

「そうだね〜」

なのはが言い、フェイト達と共に先に部屋を出て行く。

「でも、クルツくんが・・・」

「平気やで」

「大丈夫」

「そーですよ。流石にウェーバーさんもそこまで露骨にエッチじゃないですよ〜」

「・・・マオも何か仕掛けたみたいやな
はやてが仕掛けるのって・・・」

一方、壁に耳を当てて、盗聴するおばかな人達・・・

「しかし、俺は露骨にエッチだった。」

「さっ、早く行きましょう。」

風間達がフロへ向かおうとした時、宗介が呼びとめ、

「普通に入浴を楽しめ。」

「あ？ああ。解った。」

・・・。

宗介が1人、窓の外を眺める。

「さて、今のか？」

「クロノ、お前の・・・」

「解っている。やつらが限度を超えなければ、僕も何もしない。
はやてに言われてる。」

「それならいいが。」

窓際に、1人・・・少年が現れていた。

「うわぁ・・・」

「な・・・なに？」

「フェイトさん達の体を見ると、自信失くす・・・」

「かなめも十分綺麗だよ？」

「フェイトちゃん、お世辞にしか聞こえへん」

「あははは。そうですねえ。」

「な・・・なんだと？あの千鳥のスタイルがお世辞だと?!」

「お・・・落ち着けオノD。」

クルツがタオルから、スコープとドリルを取り出し、
木の壁に穴を開けようと試みるが、一向に進まない。

「な・・・なに？」

木は一ミリも削れず、傷すら付かない。

・・・故障か？かくなる上は！

クルツをオノDが肩車し、クルツがスコープを伸ばす。

「あと少しだ。」

「は・・・・・・・・早く」
が・・・・・・・・

茂みからセントリーガンが飛び出し、柵の一線を越えたスコープを打ち抜き、

「うわああああ」

反動でクルツが体勢を崩し、つられてオノDも崩れ、温泉に突っ込む。

「向こうも楽しんでるみたいですね」

「そうやね」

蓮とはやてが微笑む。

しかし、二人の微笑みは意味が違うのであった。

男子勢をどんよりとした空気が押しつぶす中、

食事に入る。

「なのはと二回目の戦いの場所も温泉の近くだったね」

「うん、あの時負けちゃってさ」

「良い思い出だね」

「戦い？なんですか？」

「いや、ちよつとしたね」

魔法少女であることを知っているのは、

マオ、テッサ、はやて、かなめ、フェイト、なのは、宗介だけである。

そのため、他の人にはばれないようにしているが、

時々、なのは達の天然さにより、ばれそうになることが多い。

「またあとでいこつか？」

「ああ、いいですね」

「じゃあ、食べ終わったら」

マオが微笑む。

そして、男子たちも目が妖しく光る。

テーブルに地図を広げ、計画を練り上げ、道具を準備する。

「完璧だ！」

クルツたちがガッツポーズを決め、いざ出陣。

だが、また、宗介が呼びとめ、

「普通に入浴を楽しめ」

と言い、窓際に歩いていく。

少々疑問に思いながらも、外に出て行く。

「よし、全面戦争だ。」

「クロノ．．．．．」

「大丈夫だ。結界を張る。」

「．．．．．。」

クロノという少年が消える。

「平和．．．．．なのか？」

宗介は1人、呟いた。

「いくぜ．．．．．」

「なあ、ライトくらい．．．．．」

「駄目だ敵に見つかる。」

「はあ？」

「ハックション．．．．．」

「風間、平気か？」

「あつうn——え？」

「どうした？」

「い．．．．．今、ボタンを押した感覚が．．．．．足元に．．．．．」

「なんだと?!」

地雷だと？

ありえない！あの二人だ……

しかし、セントリーガンがあるということは、マデューカス中佐か？

だが……あの壁は……

「風間……ゆつくり足をスライド」――

「は……」

「「え？」」

「ハックション！」

くしゃみと共に、地雷が爆発し、夜の山に轟音が響く。

「僕はもうやだよ！命がいくつあっても足りないじゃないか！」
風間が泣きながら叫ぶ。

「風間がそう言うなら、無理強いはしないぜ。」

でもよ。……本当にここで逃げちまっていたいのか？」

「え……？」

クルツが、地面の砂を足でいじりながら言う。

「そりゃ、俺だって死ぬのは怖いさ。正直逃げ出したくなる事だつてある」

「だけだよ。命を懸けても絶対に譲れないことってあると思うんだ。」

大きく息を吸い、深呼吸。一息おく……そして。

「誰も見たことの無いあの聖域を見るために！」

だから俺は諦めない！俺は戦う！自分が自分であるために！

コレをやり遂げれば、自分は一生胸を張って生きていける。

そういう何かに大切になるのって大切なことなんじゃないか？」

「「クルツさん……」」

「あとは俺1人でやってみるよ。お前らは帰りな
クルツはリュックを背負い、歩き出す。

しかし、

「なに言ってるんだ。俺たちも付き合っぜ！」

オノDと風間が笑う。

「お前ら……」

「ふむ。その心意気は見事なんだが……方向性が間違っ
てる」

「誰だ！」

「フェイトの……お兄ちゃんだ！」

「何?!」

「僕だって覗けないのに！覗かせてたまるものか！」

「なんだと！」

「スティングァースナイプ！」

光を発する何かが、クロノ周りを旋回しだした。

「な……なんだよそれ！」

「非科学だ！」

「うわぁ！」

「避けるな！」

「ふざけるなあ！避けなきゃ死ぬだろ！」

「非殺傷だ！問題ない！」

「オノD危ない！」

「なっ……」

光の弾が、オノDに直撃し、オノDが吹き飛ぶ。

「オノD?!」

「あと、2人！」

くっ……このままじゃ……

「諦める！」

「くっ……風間！」

「はい！」

「こいつは俺が抑える！お前はその目に焼き付けて来い！」

「いかせるか！スナイプショット！」

「甘い！」

光の弾をクルツが狙撃し、落とす。

なに？！

「風間、ためらうな！それでも男か！」

「く……うわあああああ！」

叫びながら、風間が走っていく。

「しまっ……」

「俺たちの勝ちだぜ。妹のヌード貰った！」

「くそおおおお！」

地面に伏したクロノが空しく叫びを上げる。

「うわああああ！」

がけに近づき、全力疾走のまま、飛ぶ。

オノD……クルツさん！

俺……たどり着きました！

壁を突き抜け、何かにぶつかって止まる。

「残念だったな。風間。実は男湯と女湯は9時から入れ替わるのだ」

この声は……まさか。

上を見上げると……宗介。

「くそおお！」

自棄になって、崖から風間が飛び降りて出て行く。

「なのは早く」

「いつ?!」

フェイトが、入ってきて、なのはを呼ぶ。

「あれ?相良くん?」

「な・・・なななぜこちらに?!」

「フェイトちゃん早いよ」あれ?」

「混浴になったの?」

「いいいいいいええええ。こ・・・ここは、くくくく・・・
・・・9時から男湯に!」

「え?あつははは。ごめんね」。戻るよ」フェイトちゃん」

「うん。お邪魔しました」

「・・・」

2人が出て行った後、温泉に宗介が沈む。

その後、清掃員が来るまで、宗介が助けられることは無かった。」

「楽しかったね」

「うん。」

「あれ?相良君、そっち乗るん?」

「は・・・はい。」

「?」

妙に元気の無い男子勢と、疲れて眠った女子たち。

そして、彼女たちと彼らはまた、忙しい日々に戻っていった。

（後書き）

あははは。

無欲こそ最大の得。

読んでくれて有難う。

感想等頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953r/>

とある温泉旅行

2011年3月10日16時41分発行